

シノドスへの歩み みことばと共に 年間第十七主日C年

小西広志

2022年7月24日

朗読箇所

第一朗読 創世記 18 章 20-32 節

第二朗読 コロサイ 2 章 12-14 節

福音朗読 ルカ 11 章 1-13 節

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は2022年7月24日、年間第十七主日となっています。今日のミサの三つの朗読をシノドスの教会の観点から読んで味わってみましょう。

主よ、どうかお怒りにならずに

今日の第一朗読は、先週の第一朗読の続きとなります。『創世記』18-19章では旅人が訪れてもてなしを受けるといふ基本となるストーリーがあります。先週の朗読箇所ではアブラハムがもてなした様子が描かれていました。19章ではソドムという町でロトがもてなします（19章1節）。アブラハムのもてなしに対して旅人はイサクの誕生を予告しますが（18章10節）、ロトのもてなしに対してはソドムの町の滅亡が告げられます（19章14節）。アブラハムもロトも、どちらも、旅人の姿で現れた主なる神さまと対話をします。アブラハムは神さまにソドムのための赦しを乞い願います（18章16-33節）。一方でロトは自分のいのちの救いを願います（19章18-22節）。

ところで、アブラハムに給仕され、もてなしを受けた三人の旅人は男の子の誕生を約束して出発します（18章16a節）。そのうちの二人がソドムに到着するのです（19章1節）。その到着の前に、見送りに来たアブラハムとソドムの町を見下ろす所で会話を交わします。その場面が今日の朗読箇所となります。

いきなり主なる神さまがソドムを滅ぼすと宣言したかのように見えますが、朗読箇所の直前には主なる神さまが迷っておられる様子が見てとれます（17-19節）。「主は言われた。『わたしが行おうとしていることをア

ブラハムに隠す必要があろうか。アブラハムは大きな強い国民になり、世界のすべての国民は彼によって祝福に入る。わたしがアブラハムを選んだのは、彼が息子たちとその子孫に、主の道を守り、主に従って正義を行うよう命じて、主がアブラハムに約束したことを成就するためである。』」

23 節から 32 節で、アブラハムは 6 回にわたって質問をし、主なる神さまも 6 回答えています。聖書では 3 回繰り返されるものですが、ここでは 6 回も繰り返されます。執拗なアブラハムの願いを見てとることが出来ます。

アブラハムの質問の意図は正しい者と悪い者が一緒に裁かれるべきではない。そして正しい者と悪い者とは区別されなければならない。さらには悪い者だけが滅ぼされるべきであるというものです（23 節）。しかし、24 節で正しい者が 50 人いたら、町を赦すべきであるという主張へと変化している点が興味深いです。

「五十人いるならば」は直訳すると「わたしが五十人を見つけるならば」となります。21 節の「見て確かめよう」と対応します。28、29、30、31 各節の「いる」も原文は「見る」です。

32 節の「主よ、どうかお怒りにならずに」はアブラハムの心情を表しているように思います。主なる神さまに何かを語れるような存在ではないけれども、甥のロトに助かって欲しいという想いがあるからこそ、あえてアブラハムは「主よ、どうかお怒りにならずに」と語り始めます。この想いを主なる神さまはここに留めて、ロトを破滅のただ中から救い出します。19 章 29 節には「こうして、ロトの住んでいた低地の町々は滅ぼされたが、神はアブラハムを御心に留め、ロトを破滅のただ中から救い出された」とあります。

取り除く

第二朗読では 14 節の小さな言葉「取り除く」に注目してください。これは、ギリシア語のアイローですが、もともとの意味は「持ち上げる、取り上げる、拾い上げる」です。そこから出発して十字架やくびきを「持って行く、運ぶ」の意味が生じます（マコ 8 章 34 節、マタ 11 章 29 節参照）。さらに「取り去る、片付ける、取り除く」の意味も生じます。群衆がイエスさまを十字架につけて「殺せ」と叫ぶ場面でもこのことばが使われます。人々はイエスさまを「取り去れ」と叫んだのです。そう叫んだ人間の罪は、イエスさまが十字架につけられることで神さまは「取り除い」てくださったのです。

しつように頼めば

福音朗読は主の祈りの箇所からです。8 節の「しつように頼めば」を心に留めてください。ギリシア語原文はアナイディアだそうです。新約聖書ではここだけに使われる言葉だそうです。「適切さへの感覚の欠如、他人が述べたよい意見に対する不注意さ、恥知らず、でしゃばり、ずうずうしさ、しきたりに対する無知」などの意味があります。ギリシア語のアナイディアには「破廉恥」、「恥知らず」の意味合いが強いようです。

福音朗読の本文中の「しつように頼めば」はギリシア語を直訳すると「アナイディアのために」となります。それで、パンを貸して欲しいと願った人のアナイディア「恥知らず」、真夜中に他人を起こす「恥知らずな態度」という理解ができるでしょう。つまり、パンを願った人の「ずうずうしさ」です。

しかし、一方で眠っている者のアナイディアとも理解できるでしょう。なぜなら、隣人への親切的な関わりを大切にするユダヤ人社会にとって、ベッドに入って寝ている者は「友達だからという」理由では起きてこない
とホスピタリティのない「アナイディア、恥知らず」と言われかねないです。そうならないために起きて与えるという意味でも理解できます。戸口に立って願う人のアナイディアであれば、神の前に立つ人間の取るべき態度となるでしょうし、寝ている人にとってのアナイディアであれば、人間に対する神の態度となります。

まとめ

ミサの中で主の祈りを唱える前には、司祭はたとえばこのような言葉で会衆を主の祈りに招きます。「主の教えを守り、みことばに従い、つつしんで主の祈りを唱えましょう」。皆さん、よくご存知だと思います。ミサの式次第のラテン語規範版や、各国語版を見ますと、「つつしんで主の祈りを唱えましょう」が、例えば英語では We dare to say となっています。直訳すると 「あえて、思い切って、おそれずに祈ります」となります。「つつしんで主の祈りを唱えましょう」はとても日本的な表現で美しいのですが、「あえて、思い切って、おそれずに」という意味が薄れてしまいます。主の祈りは「堂々と」祈ってよいのです。

今日の第一朗読でアブラハムは「主よ、どうかお怒りにならないで」と願いを続けています。また、さきほど申しましたように福音での「しつように頼めば」は「ずうずうしく頼めば」の意味でした。

主の祈りを唱えることができるのは、キリスト者の特権です。それは洗礼に由来します。洗礼のおかげで神さまの子どもとさせていただいて、神さまに向かって「父よ」とあえて、堂々と、おそれずに、しかもずうずうしく頼むことができるのです。

シノドスの教会とは、このように主の祈りを堂々と唱える人々の教会なのです。そして、父なる神さまに何でも願うことのできる教会なのです。

それではまた来週。